



栃内吉彦「浅春随筆」と小島烏水『日本山水論』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学釧路校国語科教育研究室 公開日: 2014-04-17 キーワード: 作成者: 菅原, 利晃 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00008745

柄内吉彦「浅春随筆」と小島烏水『日本山水論』

菅原 利晃

一
本稿は、柄内吉彦「浅春随筆」における『日本山水論』からの影響を考察するものである。

教材としての柄内吉彦「浅春随筆」は、一九五五(昭和三〇)年に東京書籍から発行された、高等学校国語教科書『国語 高等学校一年上(高等学校第一学年前期用)』(高国一〇六七)に収められた「随筆教材」である。原典は、『山談花語』(青山出版社、一九四三(昭和一八)年五月)である。この随筆は、「北海道帝国大学新聞」(一九三七(昭和一二)年五月二五日)に初めて掲載されたものである(注1)。

一方、『日本山水論』は、隆文館より一九〇五(明治三八)年七月七日に発行された書である。著者は、小島烏水(こじまうすい)である。小島烏水(一八七三(明治六)年～一九四八(昭和二三)年)は、日本山岳会初代会長をつとめた、登山家、随筆家である。銀行員としてつとめるとともに、紀行文や山岳随筆を発表し注目され、特に日本アルプスに関する紀行文は多くの山岳ファンを作り出したという。小島烏水の著としては、『扇頭小景』(一八九九(明治三二)年)、『不二山』(一九〇五(明治三八)年)、『日本山水論』(一九〇五(明治三八)年)、『雲表』(一九〇七(明治四〇)年)、『日本アルプス』(一九〇八(明治四一年)～一九一五(大正四)年)などがある。

『日本山水論』について、近藤信行は次のように述べている(注2)。

『日本山水論』は「不二山」とほぼ時をおなじくして刊行された。それは、噴々たる世評で読書界にむかえられた。(中略)『日本山水論』は、次代の青年たちに感化をあたえ、彼らの自然観の形成に大きな力となった。

「噴々たる世評で読書界にむかえられた」、「次代の青年たちに感化をあたえ、彼らの自然観の形成に大きな力となった」とあるように、小島烏水『日本山水論』は当時の多くの読書人、山岳ファンに賛辞をもつて迎えられた。

ところで、山岳に関する書として、小島烏水『日本山水論』に行する著名なものに志賀重昂著『日本風景論』(政教社、一八九四(明治二七)年一〇月)がある。この『日本風景論』について、土方定一は、次のように述べている(注3)。

この『日本風景論』は日清戦争のただ中に公刊され、戦争の際物出版のなかにあつて烈しく愛読され、内村鑑三が書評しているように、世を挙げて戦争に熱中している際の出版であり、又実に名篇であつたから一段と好評噴々たるものがあり、十幾版(十五版)も重ねるに至つた事情は、この著書がわが国土の景観と景観

美に文学的な表現と新しい地理学的性格を与えることによつて、これまでの大和的、盆景的な景観意識に対して、日本人の景観意識に重要な変革を与えた革命的な意義をもつていたからに外ならない。

また、『日本山水論』の著者小島烏水もまた、岩波文庫『日本風景論』の解説の中で次のように述べている(注4)。

明治二十七年、日清開戦の折柄、日本の山岳文学史上に、忘れることの出来ない一書冊が現はれた、それは志賀重昂氏の『日本風景論』である。此書に依つて一般世人は、日本には気候海流の多変多様なること、水蒸気の多量なること、殊に火山岩の多きこと、流水の浸蝕激烈なること等を教へられた。日本の風景保護すべく、登山の気風興作すべきことを説き聞かされた。その書の清楚なる体裁といひ、詩味饒かなる文章といひ、所謂科学と文学を調和する企てといひ、当時にあつては最も目新しいものであつた。

少なくとも本書に拠つて、山岳殊に火山の如何なるものなるかを教へられ、愛山の念を養成された人々は、日本山岳会の発起者の中にはある、世間も如何ばかり、此書に惹き付けられてゐたかといふことは、嘗て『時事新報』で諸名士より、古今の愛読書百種を募られたとき、その答案の大多数が、明治年間の書籍として、福澤先生の著書の外には、『日本風景論』であつたのも視られる、(中略)志賀氏の筆にかゝると、妙に魅力を有つ。是等は、若かりし頃、愛読者の一人であつた私などは、今でも猶ほ昔日の酔ひ心地を、喚び起すことが出来る。(中略)『日本風景論』が、よく行はれて、人心に大なる影響を与へたのは、書中に言つてゐることもいふが、文章が実にうまかつたのである。

志賀重昂『日本風景論』が、「当時にあつては最も目新しいもの」であり、さらには「人心に大なる影響を与へた」とあるように、当時の多くの世の中の人々が志賀重昂『日本風景論』から大きな影響を受けたことがうかがえる。特に、小島烏水は、これに心酔しみずから「愛読者の一人であつた」と評しているほどである。

『日本山水論』の著者小島烏水について、近藤信行も次のように述べている(注5)。

『日本風景論』の影響下にあつた著者が、文学的表現と科学的分析を融合させることによつて、またウエスタンの知己を得ることによつて、あたらしい時代の風景論・山岳論が展開された。

このように、この志賀重昂『日本風景論』から大きな影響を受けた、小島烏水が『日本山水論』を刊行したのは先述の通り、一九〇五(明治三八年七月)のことである。さらに、その『日本山水論』から影響を受けたと思われるのが板内吉彦の『浅春随筆』(『山談花語』)である。

二

次に、『浅春随筆』と『日本山水論』との類似表現をそれぞれあげてみる。「浅春随筆」の本文は、『北海道大学新聞』第二卷(大空社、一九八九年四月)所収の『北海道帝国大学新聞』(一九三七年(昭和一二)年五月二五日)による。『日本山水論』の本文は『日本山水論』(隆文館、一九〇五(明治三八年七月)による。いずれも初出の本文である(傍線は引用者による)。

「浅春随筆」

トナシベツ川は雪解の水がまだ冷たく、①アメ鱒は深い澗みに潜んでゐて、ぶせうな釣手の手にはおへなかつた。もう少し暖かくなればぞろ／＼釣れるカジカさえ一向に顔をみせない。岸の水溜りにはサンシヨウウヲと蛙の卵とがぶよ／＼と同居して、蚪斗はまだ出てゐなかつた。要するに水の中はまだ／＼冬眠からやつとさめたばかりの処である。(中略)

空中の春は孟はである。朝、森の中で用を達してゐると、頭の上の梢に色々の小鳥が来て美によく囀る。鶯は藪の中で美声を張り上げる。②夜が更けるとコノハツクがかん高い声でフツポウ／＼と鳴く。時々三声にフツポウ／＼と鳴く。所謂声の仏法僧でわざ／＼ラチオで放送までされたやつである。夕張岳麓の森の中で、この鳥を間近かに聞かうとは予期もせず思はず耳をすましたが、人夫達は珍らしくもなさ／＼うに、こいつはいつとも鳴くよ、気味のよ／＼くねえ声だ、といった。コノハツクは食肉性の夜鳥といふからは、気紛ぐれな人間の耳に仏法僧と有難げに響くその声も、森の静寂にねむる小鳥等にとつては不気味の限りだらう。彼等は聞につぶらなる眼を開いて小さな身を震はしてゐる事かも知れない。木々の新芽はたと／＼やうもなく美しい。鶯色から浅黄まで様々な間色にぼかさされた闊葉樹の梢は、ふつくりと暖かく膨軟に山腹を彩る。その間に針葉樹の蒼々たる円錐体が全体の色彩の弱々しさをひきしめて居る。コフシの花の白、イタヤの黄色、更にエゾヤマザクラの淡紅と、カツラの若芽の緋色は誠によきいろどりである。それ等のすべての上にまだ厚く残雪に覆はれた峯が白々と聳えてゐる。③春は、麓から次第／＼に山を登つて、やがて幾条かの雪溪のみを残して峰頭の雪と共に中空に発散してしまふとき、翠緑の夏が春のあとを追つて山を登つてゆくのだ。山の春色の中を歩いて四日ぶりで家に帰ると、ローラーカナリヤも、水盤の魚どもも、鉢の盆栽も件が留守番の功績を誇つた如く

至極元氣だつた。さうして植物園内の桜は正に満開である。やがて落花の眺めとならう。④落花はいいな。や／＼もすれば我執執善のあさましい迷妄に墮して他を苦しめ自ら悩む人の子に、これ見よがしにさばさばとあつさり散つてしまふ桜はいいな。山の春に居れば、花の散るのはたゞ惜まれるばかりだが、浮世に住めば、落花も亦よし。是非もない。

『日本山水論』

① 之を魚に見る。谿谷流激迅、峽間を劈き、大石を抱いて走り、石石跳躍、滾開して互層転巖し、水之を嘯むで雪を噴き藍を漲らすところ、大サ針の如き魚あり、閃々として隊伍を組み、遊行す、偶ま人影を見れば低下して、黒子の如く小に、深潭に潜んで出でず、溪魚なる岩魚、山鮭即ち是れなり、(第十章 日本山岳の生物 二)

② 雷鳥の外、山鳥として特種なるものに、仏法僧鳥あり、壮美なる深瑠璃色の羽毛を被ぶり、羽翼裏に各一個の白紋あり、嘴脚共に帯黄赤色(対馬産の標本に拠る)その日光を浴びて翠蔚の森林を飛翔するや、美彩閃流、加ふるにその啼くや凄怨、上田秋成をして絶世の文辞を構へしめたる所以也、(第十章 日本山岳の生物 三)

③ さしもの花の眺めも、やがて若葉する夏の初となると、風無きに自と散て、峰の流に寄集ひ、紅匂ふ一路の浪、深山の春を送り尽して、いつしかに五月雨の雲峰をこめ、溪を埋め、卯の花くだし、詫しくも、日又日晴るゝ隙なく降続く頃となつたのです。(中略)さしも烈しかった雨の脚も、次第に軽くなつて、八重に立ちこめた雲の鎖が、薄くなつてゆくかと思つてゐると、川上の空の一角、

深碧の色が輝き出して、飛騨堺の山影が鮮かに、日の光が雲間を洩れて、其巔の上に射下すと、丁度遠くの空で碧緑の玉の輝くやう、久振で仰だ山の影、日の光、雨に籠もつた人々には斯様楽しい者は他に無いでしやう。峰といふ峰から雪は離れゆき、谿といふ谿から霧は脱出で、真白き厚い霧の帷が空に引上られたかと思ふと、其後はまあ何と美し新天地でしやう、スコットランドの雨の間に見られるといふ山河の景色も、斯でしやうか、降続く雨の中間に知らない間に、森も、峰も、雲も、草も、木も、なべて碧一色におし包んで、空から落る日の光は、此に反射して満山の緑將に燃立つばかりの美さ、脱け遅れた白雲の一片が、峭立つ崖を横さまに滑つて、峻い岩に其横腹を衝割かれ、四分五裂し、絮となり蓬となつて、烈い光に照りつけられ、残の雪の淡くも消えて碧の中に失せて了ます。(第十二章 溪谷の四季)

③ 山中暦日なし。然れども一樹猶春の使者を呼んで、藪鶯の啼くを聴き、天々たる花と秦々たる葉とを併有して、夏を緑描し、色写し、或時は白雲の上に梢を挺きて、秋と握手し、或は雪を掬んで冬を刻印す。(第二章 日本山岳美論 一 山の詩的生産)

④ 暮春を人に現すれば、剃りたる頭の浅青き、若き尼なるべし、愁ひあるに於て、しかも自は愁ひを知らざるなり。美しさに於て、しかも自ら美しさを忘れたるなり。(中略) 知んぬ、暮春の色相は解脱にして、執着はその人相なるを。(第十四章 雑記 十 暮春雑筆)

こは、「浅春随筆」ではアメ鱗が深い澱みに潜んでいて、なかなか釣れないことを述べたものであるが、『日本山水論』では溪谷の魚がた

またま人影を見れば深みに潜んで出てこないことが描かれている。「潜んで」という同じ語が用いられており、魚が人間を避けて深みに潜んでいるという様子には共通点がある。なお、「浅春随筆」では、釣りをすることに言及しており、『日本山水論』とは状況が異なるが、『日本山水論』には、「大サ針の如き魚あり」と釣り針を連想させる表現がある。

こは、仏法僧に関する記述で、ことさらに『日本山水論』でも「浅春随筆」でも述べられている。『日本山水論』では、雷鳥をはじめ様々な禽獣の類について述べているが、最後に仏法僧について特筆している。さらにその鳴き声について、「その啼くや凄怨」と記しているが、「浅春随筆」では、人夫達の言った「気味よくねえ声だ」や、小鳥等にとつて「不気味の限り」という表現に共通点がある。

こは、「浅春随筆」では春が麓から山を登り、雪とも空に発散し、夏が春のあとを追つて山を登つてゆくというように季節を擬人化して表現している。これに対して、『日本山水論』第十二章溪谷の四季」では、「深山の春を送り尽して」、「春の使者を呼んで」、「夏を緑描し」と同じように擬人化した表現が見られる。特に、「浅春随筆」の「残雪に覆はれた峯が白々と聳えてゐる」と「翠緑の夏」という色のコントラストは、『日本山水論』でも、「真白き厚い霧の帷」、「白雲の一片」と「深碧の色が輝き出して」、「碧緑の玉の輝くやう」、「碧一色におし包んで」、「満山の緑將に燃立つばかりの美さ」という色彩的な対比的表現に同じ色調がみられる。特に、「残の雪の淡くも消えて碧の中に失せて了ます」という部分に直接的な色彩の対比的表現が見られる。また、この部分は、「空に引上られたかと思ふと、其後はまあ何と美し新天地でしやう」とともに、「浅春随筆」の「中空に発散してしまふとき」に類似した表現である。

また、『日本山水論』第二章日本山岳美論」にも、「春の使者を呼んで、藪鶯の啼くを聴き」「夏を緑描し」「秋と握手し」「雪を掬ん

で」という擬人化表現があるが「こにも「浅春随筆」との類似点がかがえる。

これは、『日本山水論』の「第十四章雑記」の「十 暮春雑筆」からのものであるが、奇しくも「暮春雑筆」と「浅春随筆」という題名は近似的(対照的)である。内容は異なるものであるが、『日本山水論』の「愁ひあるに於て」「執着」という語は、「浅春随筆」の「自ら悩む人の子」「我執独善」という表現に似通っている。

このように、「浅春随筆」には『日本山水論』と類似した内容や描写が見られ、『日本山水論』から「浅春随筆」への直接の引用または、背景的な影響を想定することが可能である。

ただし、分量的には、「浅春随筆」は大学新聞に載せられた一篇の随筆にすぎず、『日本山水論』二冊とは比較にならない。また、「随筆」と「論」という形態も看過できない。しかし、「浅春随筆」というわずかな記事の中に数か所の類似表現を見出すことが可能なのは単なる偶然とは言いつれぬものがある。なお、柄内吉彦著『山談花語』全体については未調査だが、卯の花をはじめとする季節の植物をめぐる記事(『山談花語』卯の花等)などに『日本山水論』との共通点が見られるようである。また、古今の詩歌・俳句を引用し感慨を述べる手法にも共通点が見られる。

三

小島烏水『日本山水論』は、実は国語科の教材そのものとしてではないが、国語科の教材に間接的に顔をのぞかせている。高等学校の「定番」的な小説教材である、太宰治「富岳百景」に次のような記述がある。丁社の「国語総合」の教科書から引く(注6)。

甲州。この山々の特徴は、山々の起伏の線の、変に虚しい、なだらかさにある。小島烏水という人の日本山水論にも、「山の拗

ね者は多く、この土に仙遊するがごとし。」とあった。甲州の山々は、あるいは山の、げてもなのなかもしれない。私は、甲府市からバスにゆられて一時間、御坂峠へたどり着く。

太宰治が小島烏水『日本山水論』を読んでいたことはこの本文からもうかがえる。先述のように、『日本山水論』は太宰治はもとより、世に広く読まれたのである。

山岳、登山に関する随筆や、紀行文の類は、明治以降現代に至るまでたいへん多くの書が世に出されている。それらのうち、とりわけ同時代あるいは同時代に近いものには、志賀重昂『日本風景論』や小島烏水『日本山水論』からの影響ははかりしれないものがあると考えられる。太宰治「富岳百景」もその一つのだが、柄内吉彦「浅春随筆」もまた、小島烏水『日本山水論』からの影響を受けたものと推察する。

ただし、「浅春随筆」への影響は、小島烏水『日本山水論』からだけのものではない可能性もある。他の山岳、登山に関する随筆や、紀行文の類に直接的な引用や類似の表現があるかもしれない。しかし、山岳や登山に対する想いには共通のものがあり、誰もが同じような想いを持たざるをえないものである。そこに小島烏水『日本山水論』のような山岳や登山に関する書による背景的な影響があるのではないだろうか。つまり、直接の引用とまでいかなくとも、以前読んだ小島烏水『日本山水論』のような山岳や登山に関する書の記憶や感慨が、登山という実際の行為を通して、追体験(あるいは発想の契機)として思い起こされたという見方もできるのである。そうだとすれば、われわれは、「浅春随筆」における小島烏水『日本山水論』の追体験を二重に読み味わっているということになる。つまり、われわれは、柄内吉彦「浅春随筆」というフィルターを通して、小島烏水『日本山水論』を読み、体験していることになるのである。

山岳や登山に対する感慨には、万人に共通のものがあり、誰もが同じような想いを持ち、誰もが同じような書をしたため、読者は同じように追体験する。そうだからこそ、山岳や登山に対する魅力には普遍的なものがあり、万人をして自然への意識をおのずから喚起せしめる力がある。それが過去幾多の者が随筆や紀行文をものした原動力となりえたのである。山岳や登山に対する書については、さらに調査、考察を試みたい。

注

- (1) 佐野比呂己「栃内吉彦『浅春随筆』をめぐって」(『国語論集』八、二〇一一年二月)による。
- (2) 『小島烏水全集』第五卷(大修館書店、一九八〇年五月)の解題・解説による。
- (3) 志賀重昂『日本風景論』下(講談社学術文庫、講談社、一九七六年九月)の解説による。
- (4) 志賀重昂『日本風景論』(岩波文庫、岩波書店、一九三七年一月)の解説による。
- (5) 注(2)に同じ。
- (6) 教科書の本文は『太宰治全集』第二卷(筑摩書房、一九八九年八月)による。

※ 本稿では、引用に際して、仮名遣いはそのままとし、漢字の旧字体は適宜新字体にあらためた。ただし、原文において「溪(溪」と「谿」のように区別している場合はそれに従った。また、ふりがなや傍点等は略した。

(すがわらとしあき／北嶺中・高等学校教諭)